小学校　特別活動　部会

部会長　市場小学校　　校長　井上 憲治
実践者　川崎東小学校　教諭　大久保　利詔

1　研究主題

クラスの絆を強める集会活動実現のための話合い活動に基づく集会活動の実践

2　主題設定の理由と意味

子どもたちが「こんな学級にしたい」という願いをもち、みんなで話し合い、実践に移す学級活動においては、正しい価値観に裏打ちされた学級経営と、学級内に支持的風土が醸成されていることがどうしても必要である。そのような学級を作るために本学級では学級開き当初より学級活動の時間はもちろん、教科指導や朝の会、帰りの会など、子どもたちと共に過ごす全ての教育活動のなかで、学級内によりよい価値観を浸透させてきた。それは、よりよい学級、より楽しい学級をみんなで作っていこうとする子どもたちの発言や行動に対して、そのつど評価して意義づけることの繰り返しによって、培ってきたものである。また、それらの価値ある発言や行動がその教科や学級活動だけに留まることがないように、評価した内容が他の経験に基づいており、その経験から関連発展した行為であることも押さえながら、互いが転移するような指導に努めてきた。

本稿では５年生を対象とした集会活動を通してクラスの絆が強まるとともに、よりよいクラス、より楽しいクラスを目指していこうとする意欲が高まる集会を実践するための話合い活動（学級会）の実際を紹介する。

4　研究の目標

どもたちが学級内に存在する様々な思いや願いそして課題点などに気づき、それらを議題として取り上げ、実現可能な実践を目指して現実感のある話合い活動を自主的実践的に計画展開することを目標とし、究明する。

5．学級の実態

子どもたちは、年度当初にこんな５年生になりたいという一人一人のねがいをもとに話し合い、『みんなが笑顔で男女、関係なく助け合い、思いやりと正義感あふれるクラスになる。つくるぞ！！光り輝く伝説を！がんばれ４の３！！』という学級目標を決め、その内容に合うデザインを考え、これをクラス全員でその掲示物を作り上げて教室の前面に掲げた。

本稿で述べる集会活動に向けての学級会が実践される１０月までの間、男女が別なく仲良く協力して係活動や清掃、集会活動に取り組めるように日々振り返りを行いながら、学級目標の実現を目指して努力を続けてきた。

また、２学期に入ってからは運動会での高学年の活躍に注目し、来年度は学校

の重要な行事に携わるようになる５年生へと成長するために、さらに仲間思いのクラスになろうという気持ちを温め合っていた。

６．本実践に関連する指導の実際

（１）集会活動の種類

よりよい学級､より楽しい学級を目指して取り組む集会活動の種類を例示すると、以下の通りである。

①みんなで楽しむことを目的とした集会

・　季節感を味わい学級生活にうるおいと有意義な変化をもたらす、ハロウィンパーティやクリスマス会などの集会

②みんなのことをわかり合い、望ましい人間関係を形成することを目的とした集会

・　クラス編成や担任が替わった後に行う「どうぞよろしく」集会

・　転入生に安心感を与え、温かく迎える「〇〇学級へようこそ」集会

③よりよい生活づくりに参画し、
みんなで達成感を分かち合うことを目的とした集会

・運動会（学習発表会）がんばったね！集会

・校内ボランティアがんばったよ！集会

（２）議題発見への関心・意欲を育てる

子どもたちは、まず自分たちの問題として「今、学級に何が足りないのか？」「何が必要なのか？」　ということを理解しなければならない。しかし、子どもたちの議題発見力は､学級活動経験の有無や度合いによって､大きな違いがある。本学級は４年進級時に担任が替わっている。そのため、学級開き後すぐに学級活動に関する実態調査を行い、全ての子どもに対して資料を使いながら、学級活動のレクチャーを行った。それと同時に子どもたちの内面に、学級内の諸問題に目を向けさせ、何とかしなければという積極的な関心や意欲を喚起させるようにした。そのために実態調査をもとに子どもたち一人一人の学級活動へのレディネスや経験値を見極めて学級活動への実践活動の可能性を見出してきた。そして主に教師による一人一人への言葉がけや子どもたちの日々の言動を取り上げて積極的に評価するなどの手立てを打ってきた。この手立ては形成的評価といえるが、ダイナミック・アセスメント（以下 DA）[1)] によれば､「学習目標の達成よりも学習者の学習可能性の発見にある」ことから筆者自身の役割や指導の質を問い、子どもと筆者（評価者）との相互作用によって、子どもたちの実践力をより高めること[2)] を念頭に置いて指導にあたってきた。

（３）関心・意欲の芽を育てる手立て

子どもたちにこのような関心や意欲を喚起し、話合いを実際に行わせながら、実践に移行させるには、子どもたちの何気ない発言の中に存在する、議題として取り上げたい内容を「議題箱に入れてみたら」と促したり、議題や活動内容にはどのようなものがあるのかが分かる、過去の学級会計画カードや議題一覧がいつでも手に取ることができるように学級活動コーナーに常設しておくなどして、子どもたちが日頃から学級の諸問題を意識できるように意図的、積極的に子どもた

ちへのアプローチを行ってきた。このように、繰り返し子どもたちの内面に関心・意欲を育てるとともに、子どもたちが自ら議題を発見したと思えるような支援やしかけ、そして教室環境も必要になる。これらの指導を心がけながら、子どもたちがクラスの問題、私たちの問題としての議題を取り上げた時には、そのことを高く評価することで、議題発見への芽を育ててきた。

（４）学級内の諸問題解決への考え方

学級会での話合いの結果生まれるものは、算数的な明確な答えではなく、友だちの思いや考え方を伝え合いながら生まれる学級みんなでつくりあげるひとつの《考え》なのである。「学級会では、『マイナス方向の意見だけを出し続けても何の解決にもならないこと』『友だちの考えを肯定的に捉え、プラス思考でよりよいものを作りあげようとする姿勢』『よりよい内容にレベルアップしようとする話合いの持ち方』が大切」なのだという話合いの基本を理解させなければならない。そのことが結果的に折り合いをつけて話し合うことに繋がるのである。

（５）価値観と判断基準

子どもたちが議題内容を話し合い、判断し、よりよい内容に決定するまでの一連の実践を行うようになるためには、話合いの経験と判断の基準となる価値観をどのように育てるかが重要になる。それは、学級活動や日常の学級経営において、常に意義ある行為や活動を取りあげて、そのつど言葉による評価（賞賛）を行うことで浸透していくものである。このような価値基準や意義をおさえた指導を繰り返し行うことが重要になる。その繰り返しが、子どもたちが議題内容を考え判断を行う際の価値基準になっていく。「この内容ではどうか」と議題を話し合い、決定する時、子どもたちは、その内容がもつ価値や意義を発達段階（学年）に応じて吟味し、判断していくことになる。

（６）決定のよりどころ

学級みんなで決定していく場面で、よりどころとなるのは、学級みんなで作った学級目標であり、学級目標に裏打ちされ、計画委員会でじっくりと話し合われた提案理由である。学級目標や提案理由に帰着して議題内容を吟味し、決定していこうと考え、判断する子どもたちの態度は、朝の会や帰りの会の中で、常に学級目標を意識しためあて作りや振り返りの指導をしておくことからも醸成されるものである。

（７）指導に生かす評価（見極めと価値づけ）

学級会の進行中には、教師は助言を行うことが指導の中心になるので、評価活動の主たる場面は、学級会の最後に行われる教師の話になるが、ここでは、子どもたちの発言や態度を具体的に取り上げ、価値づけ、評価内容を子どもたちに返すことが肝心である。また、発達段階や学級会の経験値に応じて、発言の仕方やリアクションの取り方、枕（つなぎことば）の付け方等を、機会を捉えて教師が

そのつど取りあげ、価値づけた指導をすることが重要になる。このような子どもたちの発言、反応の見とりと価値付けの繰り返しが、学級会での考え方や表現の仕方を深化させ、思考・判断・実践への確かな育ちを促すことに繋がることになる。

４．醸成された学級風土

上述のような観点からの指導で醸成された学級風土は､次のようなものがある。

① 支持的な風土の醸成（みんなで支え合う人間関係）

② 現状に満足せずに常にひとつ上のよりよい、より楽しい学級を目指そうとする総意

③ 友達の話をよく聞き取り、その話の趣旨を踏まえた上で自分の考えを述べる話合いの基礎

④ 「みんなでひとつの考えをつくり出すのだ」という学級会（話合い）の原点の理解

⑤ 安易な折り合いに走ることなく、それぞれの内容がもつ意義やよさに着目して決定していく話合い活動の実践

⑥ 賛成多数の中でも、自由に他の意義に着目した発言ができるとともに、より意義ある内容に転じていこうとする積極的な選択能力

⑦ 「学級活動の時間は週に１回だけある、私たちの時間なのだ」という認識

７．学年クラスマッチへの種目提案を視野に入れた活動を展開させるための手立て

（１）教師の「しかけ」

クラス内だけで行う集会ではなく学年全体をまきこんだ取り組みへと昇格させるためには、どのクラスからもクラスマッチの種目を提案させて、学年の話合い（学年学級会）を開きその種目を決定する必要がある。

このような教師主導ではないクラスマッチを企画するには、学年開き当初からの教師による「しかけ」が必要になる。それは、学年全体に同レベルで様々な種目への経験をもたせておくことであり、そのためには学級開き当初から、子どもたちとのかかわりの中でさりげなく様々な種目を経験させておく事が不可欠となる。しかも、個人の能力だけが際立つのではなく、高い能力をもつ個人へも友達への声かけやアシストを奨励しその行動を賞賛しながら、どの子も満足感が得られるような活動を仕組むのである。

本校は９月に運動会を実施するため、運動会後は子どもたちの学校生活が平板になりがちで、何かに取り組んでいく意欲が希薄になることが多い。

そこで、２学期始業式の学年集会（教師主導）の折に、「１１月にクラスマッチを行う。その競技種目はみんなで決めてもらう。ただし条件があり、その競技種目は学級みんなで取り組むことができて、クラスの絆がより強まる内容である。」ということを全員に伝えた。ここで生きてくるのが前述の教師の「しかけ」である。

１学期から様々な種目をゲームとして経験させておいたことが、子どもたちに

多くの選択肢を生むことになる。体育の授業だけでは経験することのできない多くの種目を、クラスの集会係が企画する週１回のみんなで遊ぶ昼休み企画「ミニ集会」で経験させてきた。

（２）経験させてきた種目

・経験させてきた種目は次のようなものである。

大縄跳び系（みんなでジャンプ、８の字連続への挑戦）ドッジボール系（ボール数の変更による変速ドッジ、王様ドッジ、フリスビーを使ったドッジビー）、スウェーデンリレー、全員ムカデ競走、野球系（コーン野球、テニスラケット野球、フットベースボール、ハンドベースボール）、サッカー。

子どもたちに多くの経験を積ませておくことが、種目の提案を行ったり、取捨選択を行ったりする場合に優れた先行経験となって、自分の経験を生かした知恵を働かせた発言ができるようになるのである。

学級全員がこれらの種目の経験を共有しているから、子どもたちみんなが納得できる内容を選択することが出来るのである。

これらの先行経験が生きた知恵として働くには、常に活動後に振り返りを行うことが大切である。というのは、ただ楽しむだけではなく、その活動にどのような意義があるのか、そのゲームにどのような意義がかくされているのかを解明しながら取り組むことが不可欠であり、振り返りの中での反省点や改善点が次時への新たな課題となってよりよい活動を生み出していくことにつながるからである。

（３）ネーミングにこだわる

・どのような集会でもネーミングひとつで子どもの意欲がグンと違ってくる。例えば次のようなものがある。

① ８の字大縄跳びの連続回数にチャレンジ
『学級ギネス記録に挑戦！』

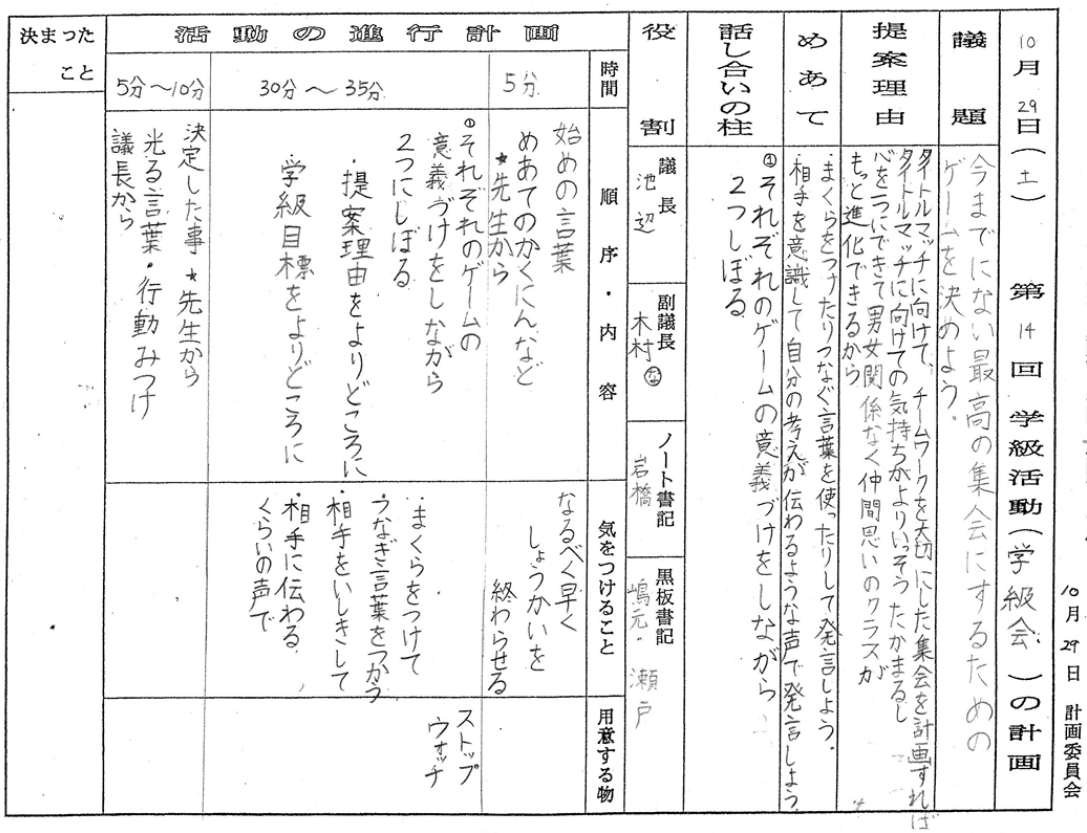
② クラスで分担しながらフルマラソンを走りきる
『完走！クラスみんなで４２．１９５』

③ 学級スポーツ大会『５－２オリンピック』

※ アンケートで取り組みたいゲームを５つにしぼり、ゲームのもつ意義や価値を考えながら話合いを進めた。

※ アンケート結果・決まっている内容・選択されなかったゲームの処理・計画委員会が持っておいた腹案の内容は、次の４点である。

※　計画委員会が話合いの事前にたてた計画カード



学級活動計画カード　10月29日　計画委員会

10月29日(土)	第14回学級活動(学級会)の計画
議題	今までにない最高の集会にするためのゲームを決めよう。
提案理由	タイトルマッチに向けて、チームワークを大切にした集会を計画すれば心をひとつにできて男女関係なく仲間思いのクラスがもっと進化できるから
めあて	・まくらをつけたりつなぐ言葉を使ったりして発言しよう。 ・相手を意識して自分の考えが伝わるような声で発言しよう。
話し合いの柱	④それぞれのゲームの意義づけをしながら2つしぼる。
役割	議長 池辺 副議長 木村㊞ ノート書記 岩橋 黒板書記 嶋元・瀬戸

活動の進行計画				決まったこと
時間	5分	30分～35分	5分～10分	
順序・内容	始めの言葉 めあてのかくにんなど ★先生から ③それぞれのゲームの意義づけをしながら2つにしぼる。 ・提案理由をよりどころに 学級目標をよりどころに		決定した事 ★先生から 光る言葉・行動みつけ 議長から	
気をつけること	なるべく早くしょうかいを終わらせる	・まくらをつけて つなぎ言葉をつかう ・相手をいしきして ・相手に伝わるくらいの声で		
用意する物	ストップウォッチ			

※　以下は４年３組、第 18 回学級会の後半での子ども達の発言は抜粋する。

８．本時の話合いで特に評価した内容

この話合いで特筆されるのは、サッカーと比較して、ドッジボールに 99 %決定するかに思われた話合いが、次の提案理由に示されている『進化』がもつ意味に対する提案者Ｈ子とＩ子の発言をきっかけにドッジボールから１８０度変わってサッカーに決定されたところであろう。提案理由の「５年生のタイトルマッチに向けてチームワークを大切にした集会を計画すれば、タイトルマッチに向けての気持ちがよりいっそう高まるし、心をひとつにできて、男女、関係なく仲間思いのクラスがもっと進化できるから。」に示してあるチームワークに帰着して、多くの賛成意見を得て収束しようとしていたドッジボールに対して、提案者Ｈ子とＩ子は、進化のもつ意味を提案者として、自分の考えをはっきりと主張することができたと同時に、それを否定的に受け取らずにしっかりと聞き取ろうとした学級の支持的風土が見てとれる。

また、その発言内容のもつ先行経験に裏打ちされた意義づけをドッジボールへの賛成者一人一人が自分の経験と結び合わせて判断材料とし、よりよい学級を築くためにはさらに意義ある内容、より価値が高いものを選択しようと話合いの方向性を変更して決定した。ここには安易な折り合いに走らないリアリティのある話合いも見てとれる。

最後の教師の話の中では、上述の提案理由で使った『進化』いう言葉の意味を

説明した提案者Ｈ子発言 21 とそれに付け加えて『進化』を具体的に意味づけた提案者Ｉ子発言 22 を高く評価したことはもちろんだが、そこに価値を見いだし、さらに意義深い決定を行った子どもたちの姿勢を高く評価した。

９．その後のクラスの実践活動

この学級会の後、子どもたちは１時間の集会を行い自分たちが選択した種目のもつ意義を集会の実践によって実感した。その後、学年学級会へ種目の提案を行った。学年全員で話し合い、３組がクラスとして提案した全ての種目がクラスマッチで行う種目として取り上げられた。子どもたちは経験に基づいた知恵を出し合って種目の推薦を行い、そのことが学年で認められたことに大いに満足し、クラスマッチに向けて昼休みのミニ集会で練習を繰り返した。

１０．クラスマッチの実際

（１）学年学級会で決定された内容

（ア）　クラスマッチのネーミングは「学年タイトルマッチ」となった。

（イ）　子どもたちの発案で、チャンピオンベルトの制作が決定された。各クラスで作った３本のベルトを懸けての熱い戦いが展開された。せめて自分たちが作ったベルトは獲得したいと、その競技への練習には特に熱が入った。

（ウ）　選択されたゲーム

以下に挙げる３つのゲームのいずれも子どもたちによってクラスの絆がより強まると認定された。

①　クラスの半数のムカデでの全員参加リレー

・勝負は３回行い順位の合計によって勝敗を決定する。

３回勝負の理由は、１回勝負では、どのクラスも本当の実力が発揮できない事が考えられるということで合意形成された。

【このゲームのもつ意義】

・学級全員の心をひとつにしないと前に進めない。

・学級半数のリレーにした理由は、半数が手拍子でリズムをとりながら応援もできるから。

②　連続８の字大縄跳び

挑戦回数は５回、その５回の中で一番多く跳べた回数のチームを優勝とする。

【このゲームのもつ意義】

・上手な人は苦手な人の背中を押して縄に入るタイミングをとってアシストできる。

・全員が声を出して回数を数えられる。

③　男女混合サッカー

・必ず全員がボールに触らなければ、負けになる。

【このゲームのもつ意義】

・必ず全員がボールに触ることができる

・パスが回ってない友達を常に意識できる

・得意な男子が女子にチャンスをつくれる

（２）学年の実践活動

子どもたちは昼休みを利用しては、どのクラスも自分たちのベストタイムや連続最高回数の更新を目指して自主的に練習に励み学年タイトルマッチに望んだ。

１１．実践後の学級の様子

大縄跳びでは大幅に記録更新をし、サッカーはパスを意識したゲームへと進化した。タイトルマッチでは「全員ムカデ競走」でチャンピオンベルトを獲得するに留まったが、子どもたちはタイトルマッチに向けて、心をひとつにして練習できたことを振り返る集会を開き、男女で肩を組み記念写真を撮って、本活動を締めくくった。

１２．成果

このように学級内だけにとどまった活動展開を行うのではなく、学年全体で同じ価値観のもと様々な活動を展開していくことで、どのクラスも子どもたちの絆は強くなり、男女がとても仲のよいクラスに成長することができた。さらに、学年間で同じ価値観をもつことができたため、子どもどうしで学級間の情報交換を盛んに行うようになり、係活動の活性化やアイディアいっぱいの集会活動も展開されるようになった。さらに子どもたちは、私たちの学校という意識を強く持つことができるようにもなった。翌年、上学年の仲間入りをして５年生になった子どもたちは、６年生をお手本に、よりよい学校、より楽しい学校づくりに貢献していこうとする積極的な委員会活動を展開した。

１３．課題と課題

本稿のような実践を行う中には筆者なりの１年間の見通しをもったカリキュラムが存在する。同学年の先生方には常に言葉でそれを伝えることができるのだが、特別活動に興味をもち学級経営の核にすえて取り組もうとしている若い先生方に言葉としてだけではなく、目に見える形でどのように伝えるか。また、集団の質と場面によって刻々と変わる子どもたちとその集団に対するそのつど評価[3)]。そして適切な言葉がけの実際もいかにして伝えていくことができるかが課題である。

また、担任として子どもたちに寄せる期待が、どれほど子ども一人一人の意欲を伸ばし、持っている力を引き出すかについても、もっと伝えなければならない。しかし、それにはその子一人一人の伸びの可能性を見極める DA の考え方が必要であると思う。特別活動を展開していく上では、望ましい集団活動を通して全てに取り組むのであるから、そこには常に質の高いインタラクション

を求めたい。集団であるからこそ伸びるであろう一人一人の、学習可能性の幅の見極めを教師がいかに行えば、よりよい人間関係を築くことのできる集団ができるのか[4)]。その DA の考え方を生かした実践を行い、その成果を若い先生方に伝えていくことも今後の課題である。

１４．おわりに

本学級会では５年生なりに価値や意義を考えながらよりよい学級生活をつくろうと話し合う子どもたちの姿を数多く見ることができた。これは今までの学級会で、発言内容や考え方を見極め、そのつど評価し、子どもたちに価値づけて返しながら育ててきた子どもたちの育ちそのものであろう。

指導に生かす評価とは評定を行うことではない。今後も子どもたちの育ちと学習可能性を見極め、支援しながらさらに高みへと誘う評価活動を展開しながらよりよい学級づくりを目指していきたい。

註および文献目録

・ Vygotsky,L.S（1934） 柴田義松（新訳）「思考と言語」、新読書社、2001 年、pp.297-307。
柴田義松「ヴィゴツキ ― 入門」、寺子屋新書、 2006 年 pp.24-32。

平田知美『教室におけるダイナミックアセスメントに関する１考察』、広島大学大学院教育学研究科紀要第３部 第 56 号、2007 年、 pp.135-142。

・ 授業の中で行われる刻々の評価活動としては、「指導と評価の１体化」を示す言葉として吉元均が用いた「指導的評価活動」がある。吉元は、「指導的評価活動は、子どもたちの発達の最近接領域に見合った要求として提出されなければならない。」としている。
吉元均「学校で教えるということ」、明治図書、1979 年、pp.149-152。

[4)] 池田光穂『正統的周辺３加と最近接発達領域』（pdf）、
http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/rosaldo/LPP&ZPD2011.pdf。

文献目録

『小学校学習指導要領解説』特別活動編、文部科学省、2008 年。

特別活動指導資料
『楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動』
小学校編、文部科学省、2014 年。

杉田洋・福岡県小学校特別活動研究会
『特別活動で子どもが変わる　新しい評価と指導のモデル集』、小学館、2011 年。